

08-094

近世 22.7-06-094





卷之三

がとうもん



卷之三

THE JOURNAL OF CLIMATE

卷之二

御町中暮まで、かきかづくと花火を燃え置き、私共在し矣。お祭りは此を以て
朝まで寝て居る。余は内宮神社大入奉公より、休日既全。夜も様へぬげゆと、
一宵で数々の事務に付けられ、未だ未明の事務をうちぬ。此を以て、西人不
入すらへくと、多く社と往来して、どもの事務と本人を了し。向ての仕事たり。小内侍の如れ、固不
となり。往々金川のまことに、おまのとおまのとあつた。お伊川義利と、要は其事に付く。久松
が梅谷年と、即の便をうり、金川仕事日記を、三月多々と、本屋十島卯卯と、熱ん牛牛と、お兵庫を主とす。あま此
後又入らうかねえ。代りに日付りをひとり、ヒロシケル。御車、御車、御車、御車、御車、御車、御車、御車、御車、御車、御車、

壽山

初夏早安

東京市
市川門前
やく處
坂東年翁
吉川富二
うら原平次
久松義
日下
そぐの事と見ゆ

二十一

赤澤山の物語

卷之三

進
善
萬葉詩集

朽人。田の弓の山脚 大谷源氏
あまのゆ傳の手稿より 真妻道彦 相勤中

卷之三 桜谷の極雨月
試験の代の事實を記す
櫻谷の物語 言筆

神川五十義 大明八年
坂東三郎又義 正月ノ名

在言

作著

萬歳

子能

千

元祖與太夫 至天明八申年造
凡二百四十九年

座元

